

## ヴィクトリア朝における歴史学と文学 —伝記という叙述スタイルから考える—

井野瀬 久美恵

### 1. 「歴史的事実」をめぐる昨今の状況

「歴史的事実とは何か」の議論に当たって、作家ディケンズを引用したE・H・カーに倣うわけではないが、話をバーバラ・チェイス＝リボウ(1939～)のつぎの一節からはじめたい。彼女は、アメリカ出身の国際的な視覚芸術家であり、詩人であり、また、従来の歴史叙述が無視ないし黙視してきた人物の視点から時代と社会を読み直すポストモダン作家でもある。

歴史的真相のあいまいさに正当な説明を与えたものが、小説というものだ。文章にした歴史は、常に作家の感性を通して解釈されているのだから、脚色はやむをえない。ナポレオンの伝記でも、フランス人、イギリス人、ロシア人が書いたものを比べてみると、同じ行動、同じ事実でありながら、ひとりの歴史上の人物が一冊一冊驚くほど違った書き方がされているのに、実際には違和感なる読めることがわかる。語り継がれた歴史の方が、真実や現実により近いはずなのだが、それでもそれは人間の記憶のあいまいさに左右されてしまいがちであろう。人間が文字にした記録という果てしない砂漠に麦粒ほどの真実を見出すことを、私たちは祈るしかない。ヴォルテールが書き遺し、ハリエット〔トマス・ジェファーソンと、彼が所有する女奴隷サリー・ヘミングスの間に生まれた娘〕が思い起こさせてくれるように、「この世には歴史などなく、もっともらしい度合いが少しづつ異なっているいくつかの作り話があるだけ」なのだから。<sup>6</sup>

ここには、「歴史的事実」（とされているもの）も、たえず記憶し直されてきたこと、それゆえに歴史とは起こった出来事以上にそれをどう記述するかの問題であること、その点でいえば、歴史学も文学も同じ土俵に位置せざるを得ないことが示されている。特に最後の言葉は歴史研究者には耳が痛い。しかしながら、「人間が文字にした記録という果てしない砂漠に

麦粒ほどの真実を見出す」ために、「文章にした歴史」から何がどのようにこぼれ落ちたかを検証すること——人物や出来事の「忘却」に作用した（と思われる）諸要因や力関係などを見直し、埋もれていた「事実」を発掘して、出来事全体を検証すること——もまた、歴史学という学問の仕事である。その意味で、チェイス＝リボウの言葉はまさしく、「歴史とは過去と現在との不断の対話」というE・H・カーの主張を裏書きしている。

実際、20世紀末以降、従来の歴史学が問題にしてきた「大きな物語」の喪失とも相まって、「大きな物語」が隠蔽してきた個人や集団の「経験」に着目、再検証して、その経験から「大きな物語」を逆照射することが歴史学研究のひとつの潮流を成してきた。その背景には、いくつかの要因を認めることができる。「大きな物語」を喪失させた現代国際情勢の変化、ヨーロッパ植民地帝国の収縮・消滅、それに伴う非白人移民の大量流入、国内で深化したポストコロニアル状況、そのなかで自らの声を発しはじめたマイノリティの姿などがそうである。こうしたことが、「歴史的事実」の再記憶化を求めてきたことは、「記憶の歴史学」の浸透とともに、歴史学の世界でも常識化されつつある。トマス・ジェファーソンが所有していた女奴隷サリー・ヘミングス、あるいはナポレオン戦争時代のイギリスとフランスで見世物にされた「ホッテントット・ヴィーナス」ことサラ・バルトマンらを真っ向から取り上げたチェイス＝リボウの挑戦<sup>7</sup>は、従来の白人中心の歴史記述に対する異議申し立てであり、イギリスにおける“Black Britons”プロジェクト<sup>8</sup>とも軌を一にする現代文化の動きといえる。

「従来の歴史記述から何がなぜどのようにこぼれ落ちてしまったのか」を検証する資料は、生命科学やIT技術の急速な発展を受けて、昨今、その範囲を大きく広げた。サリー・ヘミングズの子孫の申し立てを受けて、あるいは、イギリスにおける奴隷貿易廃止200周年(2007年)と関連するブラック・ディアスポラの実態検証のなかでは、DNA鑑定による新たな「事実」の発見が歴史解釈に大きな影響を与えている。<sup>9</sup>

忘れ去られたもの、消し去られたものを、残された文書を手がかりに粘り強く読み解きながら、そこに生命を吹き込むことも歴史家の仕事である。この歴史家の作業に大きな転機がもたらされたのが、1820年代、30年代であった。転換のこのプロセスが落ち着くところで形をとってくるも

の、それが「ヴィクトリア朝的」と呼ばれるものである。<sup>10</sup>

以下、この転換のプロセスに立ち会った3人の歴史家をとあげ、その転換がひとまず帰着し、「ヴィクトリア朝的なるもの」が歴史叙述において姿を見せる1840年代、彼らのなかで歴史学と文学の関係がどう意識されていたのかを考えながら、「歴史学と文学の対話」の論点を探っていくことにしよう。

## 2. 歴史学と文学の間—スコット、マコーレイ、そしてランケ

すでに触れたように、「ヴィクトリア朝的なるもの」のイメージも、またそれがどのようにして生まれてきたのかも、それ自体が、大きな研究テーマであるが、それへと向かうプロセスが興味深いのは、そこに人びとの感性に生じた変化が映し出されることにある。この変化は、アメリカ独立革命（イギリスにとっての植民地喪失）やフランス革命、ナポレオン戦争といった歴史の「大きな物語」に揉まれながら、連合王国そのものの再編や階級の再構築と深く関わる形で、イギリス社会に「改革の時代」を招き寄せた。<sup>11</sup>

それと同じ時期に経験されたのが、歴史をどう捉えるかということ、すなわち過去をどのように考え、どのように向き合うかの感覚に生じた変化であった。それを象徴するのが、サー・ウォルター・スコット(1771-1832)の(いわゆる)「ウェイヴァリー小説(Waverley novels)」とその人気である。たとえば、ヴィクトリア朝における歴史小説の展開をたどった英文学者アンドルー・サンダーズは、歴史家T・B・マコーレイのこんな言葉を紹介している。

過去を現在にし、遠くを近くに引き寄せ、私たちを偉大な人物と交流させ、壮大な戦闘を見渡す高台に立たせ、アレゴリーにおける擬人性と考えがちな人たちに現実の人間の血肉を与え、祖先をそれぞれ特有の言語、風習、衣装のまま、眼前に呼び出し、彼らの家を案内し、食卓に着かせ、時代遅れの衣装を寄せ集め、どっしりした家具の用途を説明するなどなど、本来歴史家の本分であるものが歴史小説家に横取りされてしまった。<sup>12</sup>

スコットからの強い影響のせいであろうか、マコーレイ自身がめざした歴史叙述は、「若い貴婦人たちの机上にある最新流行の小説に、数日間とはって代わるような何か」<sup>13</sup>にあったといわれる。出身であるケンブリッジ大学トリニティ・カレッジの礼拝堂に置かれた彼の彫像にも、つぎの意味のラテン語が刻まれており、歴史家マコーレイの姿勢を伝えて余りある。曰く、「彼〔マコーレイ〕は、諸事実が小説よりも楽しく読まれるようなやり方で、初めて歴史を書いた。」<sup>14</sup> 1868年のこの碑文は、当時、歴史と小説の境界が「諸事実」の叙述の仕方にあったことを教えてくれる。

人びとの感性が変化していくプロセスにあった1828年、マコーレイは「歴史について」（『エディンバラ・レビュー』1828年5月）というエッセイのなかで、「歴史のリアリティ」を読者に鮮明に伝えるためには、歴史家もまた、作家の物語る力、人物描写の技法を採り入れるべきだとの持論を展開している。<sup>15</sup> その姿勢で描かれたマコーレイのウィリアム3世像（その過剰なまでの好意的叙述）に対して、ジェイムズ・ミルは「面白い読み物だが、正確には歴史ではない」と述べたという。<sup>16</sup> これはどういう意味なのだろうか。

ここで注目したいのは、マコーレイの同時代人、「近代歴史学の父」とされるレオポルド・フォン・ランケ（1795-1886）のサー・ウォルター・スコット観、「ウェイヴァリー小説」批判である。マコーレイの歴史叙述に目指すべき方向性を与えた作家スコットについて、ランケは『自伝』（1824）につぎのように書いている。少し長いが、引用しておこう。

・・・19世紀の20年代には、もっとも基礎に深く立ち入らなければ、将来の諸国家や帝国を満足させることができないという主張が起こって来た。あらゆる国民、あらゆる国語の中に広まったウォルター・スコットの浪漫的歴史小説は、主として過ぎ去った時代のあらゆる行動に興味を起こさせるのに貢献するところがあった。それは私にとっても十分魅力があり、私はその一つ以上の作品を生き生きした興味を持って読んだ。しかし私はまたそれに反撥をも感じた。なかならず、『クウェンティン・ダーワード』におけるシャルル勇胆公とルイ11世との扱い方が、その個々の点においてすら歴史的伝承と相反している事が私の気持ちを害した。私は、コミースおよびこの著者の新版に附せられている同時代の報告を研究し、スコットに

描かれているようなシャルル勇胆公やルイ 11 世なるものはおよそ実在しないという確信を得た。このことは尊敬すべき学識ある作者みずからも知っているところであった。しかし私は、彼が彼の叙述に完全に非歴史的な筆致を取りながら、しかも彼がそれを信じているかのごとくそれを述べている事に対して彼を許すことはできなかった。比較検討する事によって、私は歴史的に伝承されたものは浪漫的虚構よりもより美しくすくなくとも興味あるものである事を確信した。そこで私は、そもそも虚構から身を背けて、私の著作においてはあらゆる想像や創作を避け、厳密に事実在即しようという考えを固くした。<sup>17</sup>

ランケのこの記述からは、「サー・ウォルター・スコットの歴史小説を読む」という経験が、イギリスにとどまらず、ヨーロッパ諸国の知識人に広がっていたことに加えて、この時期の歴史叙述をめぐる認識の変化が、ヨーロッパの共通経験であったことも確認されるだろう。

さて、この引用からわかることは、ランケの憤りの矛先が、史料から自然に浮かび上がる（とランケが信じる）「歴史的事実」とは異なると知りつつ、史料を裏切って偽りを叙述した著者（すなわちスコット）に向けられていることだ。「自伝」という書き物に想定される後知恵的な要素や自己弁護的な辻褄合わせを加味したとしても、いや、加味すればこそ、歴史叙述と歴史小説との違いが史料——『辛い世の中』の主人公グアドグラインドが唯一ほしいと申し立てた「事実」——にあるというランケの確信が明らかであろう。厳密な批判を経た史料が自ずと語る「事実在即した過去」を、出来事が「本来いかにあったか」を描くことこそ、ランケが確信する歴史家の仕事であった。だからこそ、ランケは、マコーレイの歴史観の根本にある進歩史観、それに誘導されたその歴史叙述を嫌悪し、『イングランド史』の名誉革命部分に修正を試みようとしていたという。<sup>18</sup>

しかしながら、1840 年代、マコーレイの『イングランド史』は書籍市場を支配し、よく読まれた。それは、歴史小説に範をとるマコーレイの歴史叙述が、その基盤を成すホイッグ的な歴史解釈が、「ヴィクトリア朝的なもの」に見合っていたからにほかならない。物理的・精神的な豊かさを謳歌するミドルクラス（とそれ以上）の人びとが、「高い配当金を得ながら、長い週末を、気持ちのいいソファに座り、贅沢なスリッパを履き、

中国産のお茶を飲み、よく働く召使にかしずかれながら、暖かい暖炉の前で読書を楽しむ」最良の友——それが、マコーレイの『イングランド史』であった。<sup>19</sup>それは、ヴィクトリア朝的な歴史と文学の関係性を物語っているようにも思われるのだが、結論を急ぐことはやめよう。その前に、われわれは、同時期に大いにもてはやされたもうひとりの歴史家、「マコーレイが軽蔑したものを賞賛する」<sup>20</sup>と言われたトマス・カーライルに目を向けてみる必要がある。

### 3. 歴史叙述と伝記の間——17世紀内乱の時代とクロムウェル

先述したように、マコーレイが『エディンバラ・レビュー』に「歴史について」という評論を書いたのは1828年だったが、ほぼ同じ頃、カーライルも似たようなタイトルで歴史論を展開している。「歴史について」(1830)、並びに「再び歴史について」(1833)がそうである。その間に位置するのが、本論考冒頭で引用した「伝記について」(1832)だが、まずは、歴史に関する以下の2つを引用しておこう。

歴史というものは、あらゆる学問の根底に存在するものであって、これもまた、人類の精神的本質が最初に産出した明確な産物であり、思想と呼びうるものに、人類が最初に与えた表現である。歴史とは、前を見、かつ、後ろを見ることである。事実、来るべき<時>は、すでに到来した<時>の中にあって、目には目えないけれども、定まった形態をもち、すでに決定され、不可避なものとして待機しているのものであって、この両者の合一によってのみ、二者各々の意味が完結するものだからである。<sup>21</sup>

歴史は、過去が現在と、遠くにあるものがここにあるものと、はっきり言葉に出して意志を交換する唯一の方法である。それゆえに、あらゆる書物は、たとえ唱歌の本、数学の論文にすぎなくても、あらゆる言葉と同様に、結局は歴史的文献である。というわけで、歴史は、最適の学問であるばかりでなく、唯一の学問であり、他のいかなる学問をも包含するのである、と行うことができる。<sup>22</sup>

ここに記されたカーライルの歴史観は、「歴史は過去と現在との不断の

対話」とする E・H・カーの主張に通じる。すなわち、カーライルにとって問題であったのは、過去そのものではなく、過去と現在との距離感であった。過去は「すでに在った未来」でもあるのだ。そんな時間の対話のなかで彼が見ようとしたのは、出来事そのものではなく、人間、人であった。ジョン・ケニヨンが指摘するように、カーライルに対する評価自体も、出来事の因果関係の分析や新しい「事実」の提示などにはなかった。<sup>23</sup>「針で突けば血が出そうに本物らしい」との『フランス革命史』(1837)への批評<sup>24</sup>は、ミラボーやダントン、ロベスピエール、シャルロット・コルデらの人物描写に対するものである。とはいえ、同書は当初、彼が期待したほどの売上げ——経済的な見返りをもたらしたわけではなかった。

ヴィクトリア朝の文化環境を考えた場合、この後のカーライルの活動はきわめて興味深い。ハリエット・マーティノーらの協力を得ておこなった有料の公開講演会(一人2ギニー、定員100名)である。

ヴィクトリア朝時代、公開講演会は、一般読者(聴衆)に文学や歴史に関する理論や概念を伝える場として、大きな役割をはたしていた。ジョン・ラスキンの『胡麻と百合』(1865)しかり、アンソニー・トロロープの「理に叶った娯楽としてのイギリス散文小説」(1870)しかり、ウィリアム・モリスの「装飾芸術の起源」(1886)しかり。<sup>25</sup>それがこの時代、作品が「読まれる」環境をも作り出していたといえるだろう。

1840年5月、カーライルが6回に渡っておこなった有料の公開講演は大成功を収め、彼に経済的な安定をもたらし、文壇での経歴を後押しした。この講演をまとめたものが『英雄崇拜論』であり、「世界の歴史は偉人の伝記である」という彼の確信は、最終回に登場させたオリヴァ・クロムウェルにおいて、頂点に達したとされる。<sup>26</sup>17世紀半ばの内乱、ピューリタン革命を「真の世界史を形成する唯一の偉大なる世界的戦争の一部」と考えるカーライルだが、彼にとって重要なことは、この内乱の時代そのものを描き出すことではなかった。カーライルはつぎのように書いている。

・・・[この内乱が]事物の本質に専念する人と事物の外見と形式に専念する人の闘いである。・・・[それが]徐々に明白となるにつれて清教徒の



性格が明瞭になりだした。彼らの遺骸は一つずつ絞首台から取りおろされた。いや、その一部分は今日すでにほとんど聖者の中に加えられている。……一人の清教徒が、それもまず彼だけ、すなわち、わが哀れなクロムウェルだけがまだ絞首刑に懸っていて、どこにも心からの弁護者は得ていないようにわたくしには思われる。……

昔からクロムウェルの偽善説はわたくしの信じがたいものであることを告白しなければならない。……いや、わたくしどもは虚偽と愚鈍の徒としてクロムウェルを想像することはできない。彼と彼の生涯を長く研究すればするほど、いよいよこのことは信じがたくなる。<sup>27</sup>

カーライルは、「わが哀れなクロムウェル」を絞首台から救い出すことが、彼が生きた17世紀半ばの内乱を読み直すことになると考えていた。それは、これまでこの時代がもつぱら「クロムウェルの敵」によって書かれてきたこと、ミルトン以来、ピューリタン側に立った史料がほとんど取り上げられていないことと関係している。<sup>28</sup> そのなかで、18世紀を通じて、クロムウェルは、トーリーにとっては王制の転覆者、ホイッグにとっては議会制度の破壊者とみなされてきた。狂信者と偽善者の間で引き裂かれたクロムウェルの人物像は、カーライルの講演の前年に出されたジョン・フォースターのクロムウェル伝にも、「彼は偽善者として生き、反逆者として死んだ」という形で踏襲されている。<sup>29</sup>

大英図書館で17世紀の内乱関係、クロムウェル関係の史料を読み漁ったカーライルは、当初予定していた伝記ではなく、『オリヴァ・クロムウェルの書簡と演説 (*Oliver Cromwell's letters and speeches, with elucidations*) (1845) という資料集にまとめた。この資料集に「史料として見るべきものは特にない」という歴史家ジョン・ケニヨンが、カーライルの試みは、クロムウェルの「真摯にして若干特異体質のピューリタニズム」を徹底して描き出し、「途方にくれながらも誠心誠意真理を追究する者」という新たなクロムウェル像を打ち出すことにあったと分析している。<sup>30</sup> 言い換えれば、クロムウェルの信仰心に注目すれば、下手だといわれるその演説にも、以下のように、彼の誠実さが読み込めるのである。

憐れむべきクロムウェル、——偉大なクロムウェル！彼は物言わぬ予言



者、語ることのできなかつた予言者であつたのだ。野性的な深みと徹底した真面目さのため、素朴で、混乱し、思うことを吐こうとしてあがいていた。その彼が、優雅な美辞麗句と粹な小才子フォークランド、道学者的なチリングワース、外交官のクラレンドンと言つた人々にまじわつたとき、彼はどんなに異様に見えたことであろう！<sup>31</sup>

そうやって、カーライルは、17世紀前半の混乱に、18世紀的な国政史、憲政史の枠組みとは違つた「ピューリタンの性格」を見定めた。ここに、その後、クリストファー・ヒルやトレヴァー＝ローパーらの論争へと発展する「ピューリタン革命史」研究の道も拓かれたといえるだろう。

ここで留意すべきは、カーライルのクロムウェル像再考も、17世紀の内乱に対する彼の関心も、彼自身の同時代経験であるフランス革命と関わつて醸成されたことである。それは、1640年代の内乱200周年に当たる1840年代の内乱の再記憶化と重なつていたと思われる。<sup>32</sup> この点に関して、カーライルが、「内乱の歴史を書くのではなく (not to write a history)、エッセイのようなものを世に送り出す (come out with a kind of Essay on the Civil Wars)」と考へていたことは重要である。そのエッセイの目的を彼はこう記している。

…to exhibit if I can some features of the national character as it was then displayed, supporting my remarks by mental portraits, drawn to the best of my ability, of the most distinguished of the actors in this great scene.<sup>33</sup>

それは、「歴史は偉人の伝記である」という主張以上に、カーライルが現在と過去の関係性のなかで歴史を捉へていたことによるのだろう。

多少の語弊を恐れずにいえば、1640年代の政治・社会の混乱は、200年後の1840年代、ヴィクトリア朝の聴衆と読者にとって意味ある「ピューリタン革命」へと、カーライルによつて創り直されたことになる。カーライルのクロムウェル資料集に意味があるとすれば、それは、ランケが求めた新史料の発見や、史料を通じて出来事が「本来いかにあつたか」を描くことにはない。<sup>34</sup> それどころか、ランケが厳しく諷めた史料批判(いうなれば、科学としての歴史学の基本中の基本)をカーライルに求められない

ことは、この資料集の第二版(1846年6月)直後に起こった「スクワイア偽文書事件 Squire Forgeries」<sup>35</sup>がはっきりと物語るだろう。

カーライルにとって、「伝記」という叙述スタイルを通じて歴史を描くことは、「過去と現在との対話」以外の何物でもなかった。クロムウェル像の再構築は、「事実」の吟味以上に、200年を隔てた2つの革命の対話であった。それは、カーライルの『フランス革命史』を自身のロシア革命への関心に応用しようとしたE・H・カーにどこか通じるかもしれない。<sup>36</sup>

#### 4. 結びにかえて——伝記は歴史と文学を分断したのか？

E・H・カーは、19世紀に流行した「歴史は偉人の伝記である」という「不幸な主張」に責任がある人物としてカーライルに触れた後、「しかし」に続けて、彼の『フランス革命史』に書かれた一節、「2500万人の人びとを重たく締めつけていた飢え、寒さ、当然の苦しみ。これこそが、フランス革命の原動力であった」に触れた。それに、「政治は、大衆のいるところで始まる。数千人がいるところでなく、数百万人がいるところで、つまり本当の政治が始まるところで始まる」というレーニンの言葉を重ねて、この数百万人(カーライルの場合の2500万人)は「数百万の個人ということであり、そこに非個人的なものは何もない」と語り、歴史における数の重要性を指摘した。<sup>37</sup>

実はこれが、本論考冒頭で指摘した「伝記論」の一節と『英雄崇拜論』の歴史理解との違いでもある。だからこそ、行為の背後に潜んでいる思想が、「行為する個人の意識的な思想や動機とは全く関係がないかもしれない」<sup>38</sup>というカーの指摘は意味深長だ。「歴史は無数の伝記の精髓である」と「歴史は偉人の伝記である」との差に、民衆に対するカーライルの軽蔑を読み込むのは、エリック・ウィリアムズやグーチだけではない。<sup>39</sup>それが、その2つの見解の間に横たわるカーライルの経験——フランス革命やチャーティスト運動などに彩られた同時代経験——でもあるのだろう。

そのようにして「行為の背後を読む」、すなわち出来事の裏を考える際に、史料文書に何を読み込み、そこからどのような「事実」を引き出すか——そこに、歴史学と文学の境目があるのだろう。事実を小説のごとく書

くことをめざしたマコーレイも、史料の見極めにもその転記にも無頓着としか思われぬカーライルも、ランケ流の「近代歴史学」からは洩れ落ちる。しかし、ヴィクトリア朝時代に広がった読者大衆が求めていたのは、ランケではなく、マコーレイであり、カーライルであった。

ここから引き出せる仮説はこうだ。1840年代、カーライルを時の人にした「伝記」という叙述スタイルは、文学の可能性をさらに拡大したであろう。と同時に、「伝記」という叙述スタイルは、同じ頃に再編されていく歴史学という学問と距離を置くようになったのではないだろうか。もっといえば、「伝記」というジャンルの台頭によって、歴史学と文学は分断され、その境界を明確化させていったのではなかったか。ヴィクトリア朝とその文化の展開を、伝記という叙述スタイルによる歴史学と文学の分断プロセスとして捉えることはできないだろうか。

その意味で、われわれが今見るべきは、大学における歴史の専門職化以上に、19世紀後半に企画、出版が相次いだ「偉人伝シリーズ」の中身とそれが果たした役割なのかもしれない。

## 注

- 1 Francis O’Gorman(ed.), *The Cambridge Companion to Victorian Culture*, 2010 の編者も同様の疑問から同書序文を書きはじめている。
- 2 たとえば、同シリーズの *Modern Japanese Culture* (2009) も、フランスやドイツなどと同様、1868年の明治維新以降、現代に至る時代の文化を“modern”として描いている。
- 3 Thomas Carlyle, ‘On Biography’, 1832, in *Critical and Miscellaneous Essays*, London: Chapman & Hall, 7 vols, vol. IV, p.53.
- 4 Thomas Carlyle, *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History*, London: Chapman & Hall, 1841, p.41.
- 5 E・H・カー（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』岩波新書、1962（1978）4頁。カーは、「科学としての歴史」を主張する実証主義者の「事実崇拜」と重ねて「事実尊重の時代」を語り、そこから「歴史家と事実」へと論を展開している。
- 6 バーバラ・チェイス＝リボウ（石田依子訳）『大統領の秘密の娘』作品社、2003年、573頁。
- 7 こうした状況については、バーバラ・チェイス＝リボウ（井野瀬久美恵監訳、安保永子・余田愛子訳）『ホッテントット・ヴィーナス——ある物語』

- 法政大学出版局、2012年所収の井野瀬「解題・サラ・バルトマンは眠れない——ポストコロニアルにおける歴史小説の試み」を参照されたい。
- 8 1980年代に英米、そしてカナダではじまったBlack History Monthとも関わるこのプロジェクトの詳細は、Mail Online、Evening Standard、BBCなどのHP参照。
  - 9 たとえば、A. Salas, 'The African Diaspora: Mitochondrial DNA and the Atlantic Slave Trade', *The American Journal of Human Genetics*, Mar 2004, 74(3), pp.454-465.
  - 10 ここで論者が考える「ヴィクトリア朝的なもの」とは、ひとつの地点に落ち着くわけではなく、またその地点を目標として一直線に進むものでもない。その意味では、ヴィクトリア朝時代に育まれたホイッグ的な歴史解釈、いわゆる進歩史観を当てはめることは適切ではない。一時的にどこかに帰着しながら、その後も脱皮を繰り返し、形を変えていく。「ヴィクトリア朝的なもの」、及びその文化は、そのような生命体としてイメージした方がいいと考えている。
  - 11 詳細はたとえば、Vyvyan Brendon, *The Age of Reform, 1820-50*, Hodder Education, 1994.
  - 12 T. B. Macaulay, *Critical and Historical Essays*, vol.I, pp.113-114. アンドルー・サンダーズ（森道子他訳）『ヴィクトリア朝の歴史小説』英宝社、2013年、8頁より引用。
  - 13 未完の代表作『イングランド史』（全5巻）の第1、2巻刊行（1848）に際して、マコーレイが友人に宛てたこの手紙については、C・P・グーチ（林健太郎他訳）、『19世紀の歴史と歴史家たち』下巻、筑摩書房、21頁。
  - 14 Thomas Woolner が1868年に建てた彫像の該当部分、“QUI PRIMUS ANNALES ITA SCRIPSIT UT VERA FICTIS LIBENTIS LEGERENTUR”の英語訳より。
  - 15 T.B. Macaulay, 'History', *Edinburgh Review*, 47 (May 1828), pp. 359-60.
  - 16 グーチ、前掲訳書、24頁。グーチは、『イングランド史』におけるマコーレイの名誉革命理解を強く批判している。ピーター・ゲイもまた、「歴史はマコーレイが描くようには展開しない」という主旨のイッポリット・テースの言葉を紹介している。ピーター・ゲイ（鈴木利章訳）『歴史の文体』ミネルヴァ書房、1977年、130頁。
  - 17 林健太郎訳『ランケ自伝』岩波文庫、1967年、83-84頁。
  - 18 グーチ、前掲訳書、23頁。
  - 19 ゲイ、前掲訳書、173頁。ゲイは、同様の表現をイッポリット・テースにも見出している。
  - 20 マコーレイの『イングランド史』について、カーライルは「そこには意味の深さはなく、非常に多くの修辭的な実のない言葉がある」と言い放った

- という。ゲーチ、前掲訳書、24 頁。
- 21 宇山直亮訳「歴史について」カーライル選集 VI『歴史の生命』日本教文社、1963 年、2 頁。
- 22 カーライル、「再び歴史について」同訳書、50 頁。
- 23 ジョン・ケニヨン（大久保桂子訳）『近代イギリスの歴史家たち——ルネサンスから現代へ』ミネルヴァ書房、1988 年、121-22 頁。
- 24 ゲーチ、前掲訳書、45 頁。
- 25 Anna Maria Jones, 'Victorian Literary theory', *The Cambridge Companion to Victorian Culture*, pp.238-239.
- 26 『英雄崇拜論』とそこにおけるクロムウェルの位置づけについては、Michael Goldberg 'introduction' of Thomas Carlyle, *On Heroes, Hero-Worship and Heroic in History*, Norman and Charlotte Strouse Edition, of the Writing of Thomas Carlyle, University of California Press, vol.1, 1993, pp. xliii-xlvi を主に参考している。
- 27 カーライル（入江勇起男訳）、『英雄と英雄崇拜』第 6 講「帝王としての英雄」、日本教文社、1962 年、293-303 頁。
- 28 マコーレイは、ピューリタン側の最良の史料は Lucy Hutchinson, *Memoirs of the life of colonel Hutchinson* だが、それ以上に、この回想録に対するクラレンドンやヒュームによる反論の方がよく知られていると述べている。T.B. Macaulay, 'Milton', *Critical Essays*, vol.1, p.172.
- 29 John Forster, *The Life of Cromwell*, 1839. こうした 18 世紀から 19 世紀初頭にかけてのクロムウェル像については、Goldberg, op. cit., pp. xliii-xlvi. フォスターは、クロムウェルは 1647、48 年までは民主主義者だったが、その後専制に身を落としたという解釈を示したが、カーライルはこれにも大いに不満だった。
- 30 ケニヨン、前掲訳書、123-124 頁。
- 31 カーライル、「帝王としての英雄」、311 頁。
- 32 ケニヨンによれば、フランス革命に続く 19 世紀初頭の混乱した政治・社会状況のなかで蘇ったクロムウェルの記憶は、労働者階級の急進主義者と、それを危惧するミドルクラスの双方から敬愛を集めたという。ケニヨン、前掲訳書、123 頁。
- 33 Goldberg, op. cit., pp.xxxvi-xxxvii.
- 34 1875 年、ロンドンに史料調査に来たランケと会ったカーライルは、ランケのことを「勉強家」と認めつつ、「人も物事も描けない」として、自分とは歴史的的手法も見方も違っていると述べたという。Mark Cumming(ed.), *The Carlyle Encyclopedia*, 2004, p387, s.v. Leopold von Ranke.
- 35 この事件については、Clyde de L. Ryals, 'Thomas Carlyle and the Squire Forgeries', *Victorian Studies*, 1987, summer, pp.495-518.

G. M. トレヴェリアンは「詩神クリオ」と題したエッセイの中で、歴史と文学の密接な関係を強調している（“History and literature cannot be fully comprehended, still less fully enjoyed, except in connection with one another.”）。<sup>i</sup> また、R. H. トーニーもやはり詩神を持ち出して、歴史と文学の「友好的な交渉」について述べている（Not the least magicians who fling wide the windows opening on these vistas are the Muses who preside over History and Literature. Each rules a separate province . . . but . . . their immaterial kingdoms flourish best when friendly intercourse between them is unimpeded by artificial barriers.）。<sup>ii</sup> この二人の著名な史家が掲げる歴史と文学の理想的関係について考えるための第一歩として、両方の学問分野にかかわる「伝記」を取り上げてみたい。

『ヴァギナ—新しい伝記』!! (2012)、『エルサレム—その伝記』(2012)、『病の帝王—癌の伝記』(2011)、『英語の冒険—ある言語の伝記』(2011)、『聖書—その伝記』(2008)。ここに並べたのは、近年出版された本のタイトルである。副題に見える「伝記」はすべて「歴史」と置き換えても何ら差し支えない。こうした方がなんとなく新鮮な響きがするというだけのことだろう。そういう卑しい目論見とは全く別の観点から、「歴史」と「伝記」を非常に接近させて考えたのがカーライルであった。<sup>iii</sup> この問題に